

専門知が信用されない時代の Evidence Update

米国で医療に対する非科学的な発言が政府から連発され、日本でもワクチンの効果を否定するような政党が躍進し、非科学的な発言をし続ける国会議員が放置され、さらにはそれに加担する研究者や医者が多く出現し、その研究者の一部が大学教授だったりする。ここで起きていることはいったいどんなことなのか。この状況を作った背景は何か。そんなことを考えながら、この序文を書き始めたのだが、なかなか後が続かない。筆が止まる。止まったところでまた考える。AIにも聞いてみた。すると以下の7つの要因に整理してくれた。

- ・情報過多と偽情報
- ・専門家と公衆(/市民)の認知的・社会的距離
- ・透明性・説明責任・誠実性への疑念
- ・ポピュリズム・政治的対立の強まり
- ・不確実さ・変化する知見
- ・教育・リテラシーの問題
- ・制度的・構造的な問題

本書も専門家による専門知の一部を形成するエビデンス、医学研究についてのもので、上記のうち、「情報過多と偽情報」に対する一つの取り組みである。AIが指摘するまでもなく、専門知が信用されない背景の一つは、インターネットを介した膨大な医療情報へのアクセスが可能になったことだろう。その中にはデマとしか言いようのないものもあるし、悪意あるウソもある。さらには情報の吟味ができない自称専門家や、一般には権威と考えられる立場の大学教授の中にも誤情報を拡散させる者がいる。単に情報が多いというだけでなく、誤った情報と妥当な情報の区別が付きにくいという問題もある。

本書には、その膨大な情報の中から選りすぐりの専門家による選りすぐりの妥当性の高い情報を提供することで、少なくとも専門家間のギャップを埋めようという意図がある。

もう一つは「不確実さ・変化する知見」という点だろうか。これまでの研究を踏まえて、新たな研究が何を付け加え、実臨床で何を变えなければいけないかについて検討する材料を提供するというのが本書創刊以来の基本的なコンセプトである。科学というのは、いったん確立されれば変化しないものであるというのが一般的な人の理解かもしれないが、科学の本質はむしろ反対で、訂正されて、変化、進歩していくのが科学である。本書の意味も、一度出版すれば終わりということではなく、その変化に対応して、毎年訂正いくことが重要な部分である。

残りの5つの点についても、本書の立場から書くことはできる。しかし書くことができるだけで、実際の社会に対してどういう効果があるかについては怪しい。それはここで取り上げた2点についても同じである。

読者の皆さんも、専門知が信用されない時代について、本書をもとに考えてほしい。

2025年12月

編者を代表して
名郷 直樹